

Vaiśeṣikasūtra と *Praśastapāda*

田 中 典 彦

は じ め に

Praśastapāda の *Padārthadharmasaṃgraha* (PDS) が, *Vaiśeṣikasūtra* (VS) の 頌の 1 ヶについて順に解釈を施した註釈書ではなく、著者の立場から組織的にこの派の思想を体系づけたものであることは周知のことである。体系化が VS との関わりにおいて如何に展開されてきたかを問うことはヴァイシェーシカ派の思想を研究するに重要であり、また興味深いことである。*Praśastapāda* によって主張された説の 1 つ 1 つを明確に理解することによって PDS 全体の思想が解明されることになるのは勿論であるが、体系化に伴う *Praśastapāda* の VS の扱いと理解も検討されなければならないであろう。そのことによって、PDS を一貫する *Padārtha* 説の確立、さらに *Īśvara* の観念の導入、世界の帰滅と創造説の採用等の問題も解明され得るであろう。

それらの問題を意識しながら、小論では、PDS の冒頭部分に焦点を当てて検討してみる。

一. 資 料 と 問 題 点

PDS の冒頭文は以下の通りである。⁽¹⁾

帰 敬 偈: *Praṇamya hetum īśvaraṃ muniṃ kaṇḍam anvataḥ /*

〔(すべての存在の) 因である主宰神に敬礼し、さらに聖者カナーダに敬礼する〕

論の目的: *padārthadharmasaṃgrahaḥ pravakṣyate mahodayaḥ //*

〔大いなる果報をもたらすパダールタダルマサングラハが説かれるであろう〕

論の主題: dravyaguṇakarmasāmānyaviśeṣasamavāyānām śaṇṇām padārthānām sādharmyavaidharmyatattvajñāna⁽²⁾m niḥśreyasahetuḥ //

tac ceśvaracodanābhivṛtyād dharmād eva //

(問題とされる文であるから、ここでは訳を付さない)

以上に記される主張の依拠した VS は Candrānanda 本 (Cand) では I. 1. 1 ~ I. 1. 3, Upaskāra 本 (Upa) では I. 1. 1. ~ I. 1. 4 である。今それらを便宜の為に示しておく、

〈Cand〉 Athāto dharmam vyākhyāsyāmaḥ (I. 1. 1)

〔さてこれからダルマを説明しよう〕

yato'bhyudayaniḥśreyasasiddhiḥ sa dharmam (I. 1. 2)

〔そこから昇天と至福の成立するものがダルマである〕

tadvacanād āmnāyaprāmāṇyam (I. 1. 3)

〔それ (ダルマ) を説く言葉であるから聖典には確実性がある〕

〈Upa〉 Athāto dharmam vyākhyāsyāmaḥ (I. 1. 1)

yato'bhyudayaniḥśreyasasiddhiḥ sa dharmam (I. 1. 2)

tadvacanād āmnāyasya prāmāṇyam (I. 1. 3)

dharmaviśeṣaprasūtād dravyaguṇakarmasāmānyaviśeṣasamavāyānām padārthānām sādharmyavaidharmyābhyām tattvajñāna⁽³⁾m niḥśreyasam (I. 1. 4)

である。PDS との思想的関連を考察する前にこれら資料に関する問題点を整理しておく。Upa の Sūtra 1. 1. 4 は Cand には存在しない⁽³⁾。このことは後世における挿入を予測せしめるが、明確ではない。Upa が PDS から取り入れたとしても dharmaviśeṣaprasūtād の語は PDS には存在しない語である。この語はまた PDS の註釈書である Vyomaśekhara の Vyomavati (Vyo. 9 世紀頃)⁽⁴⁾, Udayana の Kiranāvali (Kir. 980 A. D.)⁽⁵⁾, Śrīdhara の Nyāyakaṇḍali (NK: 991 A. D.)⁽⁶⁾ 中にも見ることはできない。したがって Upa のみに於て認め得る語であることが確認できる。dharmaviśeṣa については Cand.

4.2.5, Upa. 4.2.7 に認めることができる。これらの意味に関しては後に考察する。

Upa が sādharṃyavaidharṃyābhyām (Du. Inst) を明記しているが、現在入手できる PDS の写本の大多数がこの形を示している。tattvajñānāt が Upa に用いられているが、PDS とは異なっている。これらに関しては PDS との関連に於て考察されるであろう。

二. Cand に基づく理解

先ず、VS は 1.1.1 において、主題を明示して「さて、これからダルマを説明しよう」と記す。ここでは dharma は VS 全体の内容を包括的に示すものとして用いられている。Cand は、atha の語の使用について述べる中に、VS 著述の全体的な意図を捉えて dharma について触れている。そこでは、安隠 (kṣema) を成就する為の方法を問われた Kaṇāda が「それはダルマである」と答え、つづいて以下のように記す。

tato jagāda brāhmaṇaḥ ko dharmāḥ katham lakṣaṇaḥ kāny asya
sādhanaṇi kiṃ prayojanaḥ kāmś ca pratyupakaroti.⁽⁹⁾

〔それでは、バラモンよ、ダルマとは何であり、どのような特性のものであり、その成就とは何であり、獲得の方法は何であり、どのような人々に酬いをもたらすのか〕

という質問が寄せられた。そこで、これらの質問に答えるためにダルマを説くことを宣言して atha の語を用いたのであるとしている。直接的には atha の用例について述べている箇所ではあるが、VS がこれらの質問に対して答えて編まれたものであること、そしてその内容がダルマに関することであることが理解できる。VS の全体の概要は次の如くである。第1章：六つの分類とその要素、第2章：実体に関する考証、第3章：我と内官、第4章：身体とその構成因、第5章：運動の考証、第6章：ダルマとアダルマ、第7章：性質と和合の考証、第8章：知識の成立、第9章：有と非有、種々の知の生起、第10章：相による知、である。これらがダルマの主題のもとに包括されていることにな

る。VS 全体の内容および Cand の記述から理解すれば、知的な内容のものであろうと、人間に安隱をもたらせるところのものがダルマであるということになろう。

ko dharmah? に対して説かれたのが 1.1.2 である。すなわち、

yato'bhyudayaniḥśreyasasiddhiḥ sa dharmah

Cand の註は

phaladānaśakter yasmāddhetor abhyudayaniḥśreyase bhavataḥ sa dharmā itī bodhavyaḥ⁽⁹⁾

〔果をもたらし得る因から昇天と至福とが生じる。それがダルマであると知るべきである。〕

abhyudaya とは、これに続く註釈によって、梵天界等に望ましい身体を得るということから昇天のことであり、苦の捨離であることが知られる¹⁰⁾。また niḥśreyasa は解脱 (mokṣa) のことであるとされている。前述のことと合わせると、人間に安隱、つまり昇天と解脱とをもたらせるところのものがダルマなのである。しかし実際には VS に説かれている内容は極めて知的な要素の強いことが知られる。

PDS の内容に比定すれば、katham lakṣaṇaḥ に対しては sādharṃyavaidharṃya (共通性と相違性) によって示されたものが当るであろう。kāny asya sādhanāni には abhyudayaniḥśreyasa, kiṃ prayojanaḥ には VS に説かれる実等に関する知であり、ヴェーダに基づく祭式供儀を含む種々の実践に当ることとなる。これら全てがダルマの内容となる。このことからすればダルマは、これら全てを包括した真理を意味するものと理解し得る。インド思想においては、これらの要素がダルマの概念に包括されていることは他にも見られるのとでもである。

tadvacanād āmnāyaprāmāṇyam (1.1.3)

に関しては、tat の解釈が問題となる。Cand 註は

tad iti hiraṇyagarbhaparamāśaḥ hiraṇyam reto'syeti kṛtvā bhagavān maheśvara evocyate¹¹⁾

とし、それはヒラニヤガルバという大自在神であると解釈する。しかし VS に

は神の観念は持ち込まれていないと考えられるから、この解釈は無理であろう。

三. Upa に基づく理解

次に Upa におけるこれらの註釈を一考しておくことにしよう。

先ず Kaṇāda の VS 著述のいきさつについて述べている。すなわち

「三苦に打ちひしがれながら、三苦の止滅の道を種々の śruti, smṛti, itihāsa, purāṇa に求めてきた人々が、自我 (ātman) の本性の証得こそがその道であるということを知った。そしてその証得の道を得ようとする人々は大慈悲ある聖者 Kaṇāda のところへやってきた。

そこで、真理に関する知識と離欲と自在とを成就している聖者 Kaṇāda は、共通性と相違性に基ずく六句義に関する真実知こそが自我の本性を証得するための最上の道であると思ひなして、またその真実知が止滅というダルマ (nivṛttīlakṣaṇa-dharma) であるから、それを簡単に示そうと、先ず始めにダルマをそれ自体とその特性から説き、次に六句義を略説、定義、実証によって説き示そうと心に決めて、彼等の注意を喚起して説く。」と解説している。

Kaṇāda の説の中に、その意図として真実知 (tattvajñāna) が止滅 (= 解脱) というダルマであるから、その真実知を教えるために六句義をもって示そうとしたことを認め、提唱したのは PDS である。Upa は PDS において初めて認められる六句義や真実知等の概念を経編纂の意図として主張していることになる。これらは PDS の影響によるものと考えられる。

さて、VS 1. 1. 2 に関して Upa は、これが VS 全体の主題であることを明記して、その註釈を始める。

abhyudayas tattvajñānaṁ niḥśreyasaṁ ātyantikī duḥkhanivṛttiḥ tad
ubhayaṁ yataḥ sa dharmah⁰⁴

[abhyudaya は真実知であり、niḥśreyasa は究極的な苦の止滅である。

その両方がそこからもたらされるところのものがダルマである]

とし、続いて、abhyudayanīḥśreyasa という複合語について

abhyudayadvārakaṁ niḥśreyasaṁ iti madhyamalopī samāsaḥ pañcamī-
tatpuruṣo vā / sa ca dharmo nivṛttīlakṣaṇo vakṣyate /⁰⁹

「abhyudaya を道とする niḥśreyasa」と解釈される 中間の語を省略した
複合語であるか、または pañcamītatpuruṣa である。そしてこのダルマ
は止滅を特性とするものであることが言われる]

ここでは abhyudaya つまり 真実知から niḥśreyasa がもたらされると理解
している。abhyudaya を真実知と解するのは特異である。そして「ダルマとは
何か。そしてその特性とは何か」という弟子達の質問に答えて

yato'bhuyodayasiddhir yataś ca niḥśreyasasiddhis tad ubhayaṁ dharmāḥ/⁰⁹
[abhyudaya (= 真実知) を成就し, niḥśreyasa を成就する。それら両者
をもたらしものがダルマである]

と重ねて註釈している。先の主張と考え合わせて理解すると、真実知を通じて
究極的な苦の止滅が達成される。そしてそれら真実知と究極的な苦の止滅の両
方を達成させるものがダルマであるということになる。

VS 1.1.3 に関して、Upa は tadvacanāt の tat は VS の文脈の中には書
かれていないけれども Īśvara である。⁰⁹したがって tadvacanāt は「自在神の
言葉であるから」という意味である。故に āmnāyasya はヴェーダということ
になると解している。Upa が自ら自在神に関しては VS に述べられていな
いことを表明していることは重要である。さらにまた、tat はダルマを意味
しているともしている。しかも註釈者自身が、tat がダルマであるとする方が
原意に近いものであると判断している。⁰⁹この場合においても、ダルマを説く言
葉なのであるから āmnāya はヴェーダのことであると積している。

āmnāya は本来「述べられたもの、説かれたもの」の意味から聖典として用
いられるのであるから、ヴェーダのみを意味するわけではなく、一般的に聖典
をいうと考えられる。したがって、文脈にしたがって tat をダルマと理解した
時、それは聖典としての VS 自体を意味していると考えた方が自然であろう。
すなわち「ダルマを説く言葉であるから、この聖典には確実性がある」という
ことになる。つまり VS に説かれているところのものが正しい知識の根拠たり
得ることを述べたことになる。

VS 1.1.4 は、それを欠く Cand が公表されて以後、VS におけるその存在の有無をも含めて常に問題となってきた経である。しかも内容的には PDS と殆んど一致を見る。

再び弟子達の質問に応じて、それ自体とその特性という観点からダルマと表題との関係を述べたものであることを前記して経を記し、釈している。PDS と重なる内容であるから、ここではそれと異なった部分の理解のみを取り上げおきたい。

dharmaviśeṣaprasūtāt が問題となる。註釈は、

etādṛṣaṁ tattvajñānaṁ vaiśeṣikaśāstrādhīnam iti tasyāpi niḥśreyasahe-
tutvaṁ daṇḍāpūpāyitam / tattvaṁ jñāyate'neneti karaṇavyutpattyā śās-
traparatve dharmaviśeṣaprasūtād ity anenānavayāpatteḥ⁽⁸⁾ /

〔このような真実知はヴァイシェーシカの教えに依拠しているのであるから、それがまた至福（究極的な苦の止滅）の因であることは当然のことである。これによって真実が知られるという具格を用いた説明であるから、経に dharmaviśeṣaprasūtāt と記されてあるのは、（もしこの語がなければ）これとの非結合関係が（誤って）生じてしまうからである。〕

としている。VS 1.1.4 において、真実知から至福がもたらされることを記しているが、何故真実知が至福の因たり得るかについて、先ず、真実知がヴァイシェーシカの教えに依拠したものであるからであることを主張し、そして、真実知とダルマの関係を示すものが dharmaviśeṣaprasūtāt であることを述べている。その関係とはダルマによって真実が知られるということである。

さらに註釈は、

dharmaviśeṣaprasūtād iti tattvajñānād ity asya viśeṣaṇam / tatra dha-
rmaviśeṣo nivṛttilakṣaṇo dharmāḥ⁽⁹⁾ /

〔特別なダルマから生じた〕というのは、「真実知から」という語の修飾語である。この場合、特別なダルマとは止滅であるダルマである〕

としている。nivṛttilakṣaṇo dharmāḥ と pravṛttilakṣaṇo dharmāḥ はそれぞれ別のダルマを意味していて、前者は至福をもたらすことを特性とし、後者は

繁栄、喜悅等をもたらすことを特性とするものと解されている。ここではしたがって両者の中の前者であることを示している。さらに註釈は「もし真実がこれによって知られるということが論の tattvajñāna であると言うならば、その場合、特別なダルマとは神の任命と恩恵を意味すると言うべきである」とし、神との関係に言及している。すなわち、Kaṇāda が神から恩恵と囑託を受けてこの経を説いたということを意味することになるのであるが、VS の中にこの語を置くとすれば、Kaṇāda に聖知をもたらせた特別なダルマとした方がよいであろう。

(Tayanārāyaṇa は *Vivṛtti* の中で、特別なダルマから生じたというのはこの世あるいは前世において得られた行為の果としての徳によって生ぜられたという意味であるとしている。真実知は知の働きに関わるものであって、知の働きも行為に似て dharma-adharma に関係することが認められているから、この解釈も可能であろう。)

神の概念の導入が VS 1.1.4 の中に意味されていると理解できるとすれば、この経は後世の挿入であろうとする見解が妥当なようである。

四. PDS の 考 察

さて、PDS の主題を説く部分について考察してみる。考察の便宜の為に再度原文を記しておくこととする。

dravyaguṇakarmasāmānyaviśeṣasamavāyānām śaṇṇām padārthānām
sādharmyavaidharmyatattvajñānām niḥśreyasahetuḥ

である。

先述のように、Upa 1.1.4 の冒頭に dharmaviśeṣaprasūtāt があること、sādharmyavaidharmyābhyām であること、tattvajñānām niḥśreyasam の形を取っていることを除いては、内容的に一致していると言い得る。Upa 1.1.4 が成立的にも古く原型に近いとされる Cand に存在しないこと、PDS にあまりに合致していること等から後世の挿入であろうとされているのであるが、そうであったとしても、PDS のこの部分を理解しようとする場合には、その註

釈とともに重要である。したがって以下には PDS の註釈の 1 つとしての位置を与えて考察する。

この部分は直接的には VS 1.1.2 を受けたものである。「それから昇天と至福とが成就するところのものがダルマである」はダルマが昇天と至福をもたらせる因であることを意味している。Upa の tattvajñānān niḥśreyasam は PDS では tattvajñānam niḥśreyasahetuḥ であり、意味的には相違はないが、後者の方が両者間の因果関係をより断定的に示している。ところで niḥśreyasa をもたらす因は、VS 1.1.2. ではダルマであるのに対して、PDS および Upa 1.1.4 においては真実知である。このことは PDS の思想を理解する為の極めて重要な示唆を与える。少なくとも、PDS が VS のダルマの位置に真実知をもってしていることが明確となる。そしてこのことが、PDS が padārtha という新たな概念を導入したことと関係すると考えられる。

真実知と至福との関係について諸註釈を検討してみよう。Vyo. は、

niḥśreyasasya ca hetur yathā tattvajñānaṁ tathoktam evādivākya /

〔至福の原因は正しく真実知なのであるからそのように説かれる。〕

として、真実知が至福の因であることを認めている。その上で真実知は綱要書 (saṁgraha) からのみ生じる。そして真実知は経作者の知である。何故なら、真実知は神の教令 (codanā) によって生じた特別なダルマから生じているからであるとの趣意を述べている。真実知とダルマの関係は直接的には述べられてはいない。経作者の真実知は特別なダルマから生じているからこそ真実知である。そしてその真実知が綱要の中に表わされているのであるから、綱要からわれわれに真実知が生じるという意味であろう。とすれば真実知は経作者の聖知を通じてのダルマの顕現ということになるとも理解できる。いずれにしても真実知はダルマと関わるものと考えられていたようである。

Vyo. が dharmaviśeṣa に触れていることは別の意味で興味深いことである。既に述べたように、この語を用いているのは Upa. の sūtrapāṭha であった。Vyo. は今までのところ、少なくとも Upa. よりその成立が早いと考えられている。その Vyo. がこの語を用いているということから新たな理解が生じるであろう。つまり、Vyo. が扱った VS 写本にこの語が存在したかと

いう疑問が生じる。もしそうであったと仮定すれば、Upa. の伝えるように sūtrapāṭha にこの語があったことになる。あるいはまた、Upa. が Vyo. によってその sūtrapāṭha にこの語を加えたのかという理解も可能である。ただ、この問題の解決はさらに詳細な研究を待たざるを得ない。

次に Kir. によって考察してみる。Kir. も綱要の語を用いながら註釈している。

tena dravyādīnām sādharṃyavaidharṃyābhyām tattvaṃ pratipādayan
saṅgraho niḥśreyasaṃ sādhayati ... /

〔実体等の共通性と相違性によって真実を教えている綱要は至福を達成させる。〕

として、間接的にはあるが、真実知が至福を成就させることを認めている。ここでは真実を教えるものが綱要なのである。śruti, smṛti, itihāsa, purāṇa 等の教えるヨーガの教示によって、長い間に培われてきた止滅というダルマからのみ真実知が生じるとしている。ここでは、したがって、ダルマは真実知の基となるものであるとして理解されている。そしてそれは実践をも含めた教えであり、真理を意味すると解し得よう。ダルマに基礎づけられた真実知はダルマとして見做される。このことはインド的思惟においては決して不思議なことではないのである。仏教においても、仏陀によって悟られた真理もダルマであり、そして仏陀によって説かれたものもダルマと見做されていることから、そのことが理解されるであろう。

NK. がくしくもわれわれの疑問と全く同じ疑問のあることを想定しているのは極めて興味深い。つまり、PDS と VS とにおける真実知とダルマとに関して述べている。

nanu yadī tattvajñānaṃ niḥśreyasahetus tarhi dharmo na kāraṇam,
tataḥ sūtravirodhaḥ—yato'bhyudayaniḥśreyasasiddhiḥ sa dharmah—iti /

〔もし真実知が至福の原因なのであるならば、ダルマは原因ではない。つまり、「それから昇天と至福とが成就するところのものがダルマである」とする経と矛盾するではないか〕

という対論者の疑問を受けて、真実知が至福の原因であることを認めながら、

tanniḥśreyasaṁ dharmād eva bhavati, dravyāditattvajñānaṁ tasya
kāraṇatvena niḥśreyasasādhanaṁ iti abhiprāyaḥ /

〔その至福はダルマからのみ生じる。実体等の真実知は、至福の原因たるものとして、至福の成就の手段である。〕

と解し、六句義を知ることが人間の目的成就の手段であると理解して、それら1つ1つを区別して知らせる為に実体等の句義とそれらの共通性と相違性⁶⁹とを説いたのであるとしている。ここに明確にダルマと真実知との関係を示している。真実知はダルマによってもたらされるものであるから至福の手段なのであるとする。真実知を手段と解するのは sādharmyavaidharmyābhyām を意識してのことであると思われる。そして PDS の tac ～ の文の解釈に移って次のように言う。ダルマもまたそれ単独では至福をもたらしことはなく、主宰神の希望によって恵まれてこそ成就するのであるから、この文章が述べられたのであるとする⁶⁹。

ここでも真実知はダルマによってもたらされるものであり、ダルマを基とするものであるから、真実知はダルマの顕現としてダルマであると理解できる。

以上から、真実知が至福の原因であること、そして、真実知がダルマに基づいて生じていること、真実知がダルマの顕現したものであるからそれはダルマでもあることが理解できる。このように理解する時、VS. 1. 1. 2 のダルマと PDS. の真実知との間に矛盾はないことになる。以上で至福に対するダルマと真実知との関係が明らかにされた。そこで次に、

padārthanām sādharmyavaidharmyatattvajñānaṁ

についてについて考察しよう。

五. Padārtha と tattvajñāna

ここでも諸註釈の理解から始めることとする。Vyo. はこの問題に関して細釈を施してはいないようである。しかし、

tac cātmaññānaṁ itara viviktād itara padārthajñānāpekṣam ity arthavada
dravyādisādharmyavaidharmyajñānaṁ /

〔そして、それ（真実知）はアートマンの認識である一方、他方、句義を知ることに基づくという意味のあるように、実等の共通性と相違性とに基づき知識である。〕

と定義づける。実等の句義を共通性と相違性によって知ることが真実知なのである。

Kir. もまた極めて簡単にこの問題に触れている。すなわち、padārthāḥ とは何かということに関しては、padārthāḥ とは実体等のことである。dharmāḥ とは何かということに関しては、共通性と相違性という性質のことである。つまり普遍と差別のことである。真実とは不変の性質のことである。⁽⁶⁴⁾そしてそれは共通性と相違性によってのみ識られる。⁽⁶⁴⁾

総合的にこれを理解すると、padārtha は識られるべき対象であって実体等のことであり、この対象を共通性と相違性によって識ることによってそれらの不変の性質、つまり真実が得られるということになる。「したがって padārthāḥ とは中心的な主題として知られるべきである」⁽⁶⁵⁾とも記している。したがって Kir. は、対象としての句義に関する知が真実知となるが、それには共通性と相違性によらねばならないと解していることとなる。padārtha—sādharmya—vaidharmya—tattvajñana は対象—知の働き—結果ということになる。

NK. の場合を吟味してみよう。

atra padārthadharma jñānād eva padārthānām api saṅgraho labhyate,
svātantryeṇa dharmāṇām saṅgrahābhāvāt /⁽⁶⁶⁾

〔ここでは事物の本性に関する知識に基づいてのみ諸事物の理解が得られる。何故なら、それ（事物）独自では本性の理解は生じないからである。〕

先ずここでは padārtha が事物を意味していることが理解できる。事物それ独自では理解をもたらしえない。必ずそこに知の働きを予定しなければならない。したがって事物とは言っても、知られる対象としての事物である。それが padārtha の意味である。このことは PDS における padārtha の定義に合致するであろう。

さらに NK. はさらに以下のように記している。

yasya vastuno yo bhāvas tat tasya tattvam / sādharmaṇo dharmāḥ

sādharmyam, asādhāraṇo dharmo vaidharmyam / sādharmyavai-
dharmye eva tattvaṁ sādharmyavaidharmyatattvam, tasya jñānaṁ
niḥśreyasa⁶⁷hetuḥ /

〔ある事物がもつ本性，それがその事物の真実である。共通にもたれてい
る本性が共通性であり，共通にもたれていない本性が相違性である。共通
性と相違性についての真実が共通性と相違性の真実である。その認識が至
福の因である。〕

sādharmyavaidharmyatattvajñānam が，ここでは共通性と相違性について
の真実知と理解されている。したがって，NK，の主張は「諸事物の共通性と
相違性についての真実知」ということになる。

Upa. がこの問題に異った解釈を与えている。本来は Upa. 1. 1. 4. に対する
註釈であるが，内容的に一致するものであるから，ここに取り上げてみる。

tattvasya jñānam iti karmaṇiṣaṣṭi / sādharmyavaidharmyābhyām iti
prakāre tṛtīyā / tatra sādharmyam anugato dharmāḥ, vaidharmyaṁ
ca vyāvṛtto dharmāḥ / yady api kvacit sādharmyam api kutaścid
vaidharmyaṁ kutaścid vaidharmyam api keṣāṁ cit sādharmyam
tathāpi tādrūpyeṇa jñānaṁ vivakṣitam /⁶⁸

〔tattvasya jñānam の tattvasya は対象を表す第六格である。共通性と
相違性によってというのは方法の意に用いられた第三格である。その中
で，共通性とは一致する本性である。また相違性とは区別された本性であ
る。ある場合には共通性であっても他のところでは相違性であり，あると
ころでは相違性であっても，他のものには共通性である。そのようなもの
として知が説明されたのである。〕

と註釈している。要約すれば，真実知とは真実を知ることである。共通性と相
違性によってというのは知ることの方法あるいは手段の意味である。知られる
対象は事物である。したがって全体で，事物の真実を共通性と相違性によって
知ること，ということになる。

NK. が特別に「事物の共通性と相違性についての知識」と解している。他
は「事物を共通性と相違性によって知ること」の意味を与えている。前者の解

釈にしたがうと知識の内容が共通性と相違性ということになる。つまり知る対象が共通性と相違性という性質 (dharma) ということになる。後者では、共通性と相違性とは知る方法あるいは手段の意味となり、知の働きの様態を示すこととなる。知の対象が事物 (padārtha) であり、知識の内容も事物そのものということとなる。われわれが事物を知る時、事物そのものを知るのであるか、その性質を知るのであるか。あるいは事物そのものを知るのであるか、知の内容を知るのであるか、が問題となるようである。

お わ り に

VS とその註釈、さらに PDS と諸註釈との中に、PDS の冒頭文の理解に関わる種々の問題を検討してきた。このことを通じて理解でき得たことについて一考しておきたい。

まず PDS が VS を踏まえながらも、大きな展開を示しているのは VS. 1.1.2 に見られる dharma に対して tattvajñāna を用いたことである。VS. においては dharma が昇天と至福をもたらす因とされていて、dharma を説くからこそ VS が確実な知識の根拠となることが主張されていた。元来、この語の意義は極めて広い。存在の根底にあって存在を存在たらしめるもの、存在の本性、存在の特性、人間の徳性、義務、解説をもたらせる宗教的实践、聖知を得た者の教え等を意味している。VS が 1.1.1 で「さてこれから dharma を説明しよう」と言う時、当然のことではあるが、この経に説かれる全ての内容を示していると理解すべきである。経の内容から、ここに言われた dharma を考えてみると、真理という意味が最もふさわしいようである。なぜなら、インドにおける真理はただ単に知的に求め得るもののみを意味するわけではなく、宗教的に体験されたもの、あるいは宇宙の摂理等をも含むからである。既に述べたように、人間に至福をもたらせるものと定義づけられるだけである。VS は極めて知的な教えを展開している。実体を説き、性質、運動を教えている。これは明らかに現象世界を知的に理解しようとするものである。「普遍と特殊は知によるものである」は人間の知の働きをも含めて、それを客観的に示

そうとしたものであろう。和合は実際にわれわれの眼前にある現象存在の存在様式を示すであらう。これらによって世界現象を説明づけるとともに、これらが世界現象を形成すると捉えるのである。したがってこれらは世界を成り立たせている真理に関わることである。少なくともこれらの分析と総合によって、現象世界とその奥にあるものを知的に、また実践的に得ることによって至福を成就したという意識が経作者 Kaṇāda にあったと考えられる。したがって彼は至福をもたらすものがダルマである。つまり真理を証得することであるとしたのであろう。

VS の内容が極めて知的な存在に関する体系を説いていると理解したのが Praśastapāda である。彼が PDS においてなそうとしたことは決して新たな思想的体系を打ち立てることではない。それはどこまでも VS に基づいた思想的な理解と体系化であったと見るべきである。

前述の諸註釈に対する簡単な吟味を通して Praśastapāda の立場を一考してみよう。VS. 1. 1. 1 に見られる dharma, つまり真理は PDS においては、

tac ceśvaracodanābhivyaktād dharmād eva

という表言の中に受けとめられている。ここに言われる dharma は自在神の教示に基づいている真理のことである。そしてそれは苦の止滅という dharma (nivṛttīlakṣaṇadharmā) である。ここに自在神の観念を導入したところに大きな意味があるようである。つまり Praśastapāda は、このことによって dharma の位置を昇華させたのである。このことに関しては故なきことではない。VS. 6. 1. 2 に、

na cāsmad buddhibhyo liṅgam reṣeḥ⁸⁹

〔聖仙の知はわれわれの知からは生じない。〕

とあり、また、VS. 9. 28⁹⁰ に、

ārśam siddhadarśanam ca dharmebhyaḥ

〔聖仙の知と修行完成者の見はダルマから生じる〕

とあることによって、聖仙の知はわれわれの知なのではなく、またそれは dharma から生じるものであることがわかる。Kaṇāda は Praśastapāda にとっては帰依すべき聖仙 (muni) である。聖仙の教えは dharma を開顯したも

のである。今、その教えに基づいて真実を知ろうとするわれわれの知は直接 dharma なのではなく真実知にとどまる。したがって、この謙虚な彼の立場から tattvajñāna (真実知) を説くことを宣言したのであろう。しかし真実知もまた至福の因となることを主張しなければ人々に目的を与えることにならないし、また真実知を説くことの意味がない。そこで真実知の至福の因たることをも合せて強調して tattvajñānaṁ niḥśreyasahetuḥ としたのである。そしてさらにこの真実知が神の教令によってもたらされた dharma から生じたものであると考えた。dharma はこの時点で、神との関わりを持ったと共に、真実知より高位のものとして意識されたことになる。VS. 1. 1. 3. の dharma に代って真実知を位置せしめたのは以上のような考えに基づいたものと思われる。

真実知は如何にして生じるか、ということについては、Vyo., Kir. ともに実等の padārtha の共通性と特殊性によることからもたらされることを説いている。NK. は padārtha の共通性と特殊性についての真実知であるとするところに、少し異った見解を示している。Upa. は、真実知とは真実を知ることであって、対象の真実を共通性と特殊性によって知ることであると註釈している。これらによって、真実知は共通性と特殊性によって得られると理解してよからう。このことは VS. の知に関して説くところに、

sāmānyaviśeṣāpekṣaṁ dravyaguṇakarmasu (Cand. 8.6)⁽⁴⁾

〔実体、性質、運動に関する知は共通と特殊に基づいてある〕

とあること、さらに、VS. 第1章に実等の共通性、特殊性が説かれていることに基づくものといえる。すなわち sāmānyaviśeṣa が PDS において sādharmyavaidharmya という知の働きとして取り入れられたことになる。

真実知とは何に関する真実知なのであるかが問われねばならない。それは当然のことながら padārtha である。この語は本来「言葉の意味」「言葉によって表わされるもの」ということを意味している。そして諸註釈はそれが經に説かれた実体等のことであることを確認している。このことは何を意味するのであるか。実体等がその言葉で説かれたのは VS においてである。したがって Praśastapāda にとっては、padārtha は VS において pada によって説かれたものの artha である。すなわち「言葉によって表わされているもの」とい

うことになる。彼は VS の内容に極めて忠実に従いながら知的に体系化しようとしたのである。このことによって PDS が bhāṣya の位置を保つことができるのである。

先に述べたように、padārtha とは具体的には実体等の 1 々であり、それらが VS に説かれている全てである。したがって「言葉によって表わされているもの」とは VS そのものをも表わすことができる。これらのことから、

dravyaguṇapakarmasāmānyaviśeṣasamavāyānām śaṇṇām padārthānām
sādharmyavaidharmyatattvajñānaṁ niḥśreyasaḥetuḥ

は「実体、性質、運動、普遍、特殊、和合という六つの言葉によって表わされているものの共通性と特殊性とに基づく真実の知は至福の因である」ということになるであろう。

したがって PDS とは「経に説かれていることに基づく真理の理解（あるいは綱要）」ということになる。また、それは「⁽⁴⁾Vaiśeṣikasūtra に基づく真理の理解（あるいは綱要）」ということとなる。

Praśastapāda の VS に対する意識がそうであったとしても、彼の体系化における niḥśreyasa の因としての tattvajñāna, つまり jñāna の積極的な導入は知の手段、すなわち sādharmyavaidharmya を重要なものとするとともに、知の対象としての padārtha をより具体的なものとさせていったものと考えられる。

註

- (1) この小論での PDS は Vizianagram Sanskrit Series vol. iv, The Bhāṣya of Praśastapāda together with the Nyāyakandālī of Śrīdhara, Ed. by Vindhyeśvari Prasad Dvivedin, Benares 1895 を用いた。
- (2) PDS. p. 6. ChSS. No. 61. p. 20. は Sādharmyavaidharmyābhyām
- (3) Vaiśeṣikasūtrapaskāra of Śrī Śaṅkara Miśra, with the Prakāśikā Hindi commentary by Ācārya Dhunḍhirāja Śāstri, ed. by Nārāyaṇa Miśra, KSS. 195. 2nd. 1969. Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda. critically Edited by Muni Śrī Jambuvijayaji. Baroda, 1982. GOS, No. 136. に Candrānanda 本と Upaskāra 本との間の sūtrapāṭha の対比が示されている。(pp. 77~98.)
- (4) The Praśastapādabhāṣyam of Praśastadevācārya with commentaries (up to

- dravya), *Sūkti* by Jagadīśa Tarkālaṅkāra, *Setu* by Padmanābha Miśra, and *Vyomavati* by Vyomaśivācārya (to the end). Ed. by M. M. Gopinath Kavirāj and Dhundhirāj Shāstri. Chss. No. 61, 1924—30.
- (5) *Prasastapādabhāṣyam* with the commentary *Kiraṇavali* of Udayanācārya. Ed. by Jitendra S. Jetly. Baroda. GOS. No. 154
- (6) *Prasastapādācāryapraṇītaṁ Prasastapādabhāṣyam* (padārthadharmasaṅgrahā-khyam), Śrīdharabhaṭṭapraṇītayā Nyāyakandalivyākhyāyā. saṁcalitam, sampā-dako hindībhāṣānuvādakaś ca. po Durgādharaḥjā Śarmā Vārāṇasyām. Gaṅgā-nāthajhā Granthamālā (1)
- (7) 現在, 54本の PDS 写本を入手している。その内, Dravya 章を有している写本の中では, L. D. Institute. MS. No. 5736. Cat. 130E のみが Viz, と同じく sādhar-myaidharmyatattvajñānam であり, 他の MS は全て sādharmyavaidharmyā-bhyām tattvajñānam である。
- (8) GOS. No. 136. p. 1. 1. 5
- (9) 同上. p. 2. 1. 1
- (10) 同上. p. 2. 1. 2 abhyudayo brahmādilokeṣv iṣṭaśarīra prāptir anarthoparamaś ca /
- (11) 同上. p. 2. 1. 3 niḥśreyasam adhyātmano vaiśeṣikaguṇabhāvarūpo mokṣaḥ /
- (12) 同上. p. 2. 1. 7
- (13) Upa. p. 3. 1. 8—p. 5. 1. 4 tāpatrayaparāhatā vivekinas tāpatrayanivṛttinidānam anusandadhānā nānāśrutismṛtītiḥsapurāṇeṣv ātmatattvasākṣātkāram eva tad upāyam ākalayām babbhūvuḥ / tatprāptihetum api panthānam jijñāsamānāḥ paramakārūṇikāḥ kaṇādaḥ munim upasedur atha kaṇādo munis tattvajñāna-vairāgyaiśvaryasampannaḥ ṣaṇṇāḥ padārthānāḥ sādharmyavaidharmyābhyām tattvajñānam evātmataṭṭvasākṣāt kāraprāptaye paramaḥ panthā iti manasi kṛtvā tac ca nivṛttīlakṣaṇād dharmād eṭeṣām anāyāsena setsyatīti lakṣaṇataḥ svarūpataś ca dharmam eva prathamam upadiśāmy anantaram śad api padārthān uddeśalak-ṣaṇaparīkṣābhīr upadekṣyāmīti hṛdi nidhāya teṣām avadhānāya pratijānīte—
- (14) Upa. p. 11. 11. 3—4.
- (15) Upa. p. 11. 11. 4—5.
- (16) Upa. p. 13. 11. 1—2.
- (17) Upa. p. 14. 1. 9. tad ity anupakrāntam api prasiddhisiddhatayeśvaram parāmṛśati.
- (18) Upa. p. 4. 1. 3 yad vā tad iti sannihitaṁ dharmam eva parāmṛśati. tathā ca dharmasya vacanāt ...
- (19) Upa. p. 17. 11. 1—3
- (20) Upa. p. 29. 1. 6—p. 30. 1. 1.
- (21) Upa. p. 30. 11. 1—2. yadi tu tattvaṁ jñāyate'neneti tattvajñānam śāstram ucyate

tadā dharmaviśeṣa īśvaraniyogaprasādarūpo vaktavyaḥ.

- (22) 宇井伯寿博士はその著 *The Vaiṣeṣika Philosophy* の中で次のように述べている。 “The whole system of the Vaiṣeṣika is included in dharma (1.1.1), and this dharma is divided into two divisions (dharma-viśeṣa) (1.1.2). The one (dharma-viśeṣa) is tattva-jñāna of the six categories, and the other (dharma-viśeṣa) is the religious practices derived from the the Veda (6.1.1.—16; 6.2.1—9; 10.2,8—9). The former brings about niḥśreyasa (=mokṣa), as stated in 1.1.4, and the latter effect abhyudaya (svarga, or the sukha in svarga), as shown by sūtra 1.1.3 (tad-vacanād āmnāyasya prāmāṇyam = 10.2.9)”. *The Vaiṣeṣika Philosophy* by H. Ui ChS Studies (reprint) vol. XXII. しかし、1.1.2. から dharmaviśeṣa をこのように理解できるかが疑問である。
- (23) *The Vaiṣeṣikasūtra* of Kaṇāda with The Commentary of Śāṅkara Miśra and Extracts from the gloss of Jayanārāyaṇa Nandaraḥ Sinha SBH. 6.
- (24) Vyo. p. 20 (jha). 18.
- (25) Vyo. p. 33. 1.4. tathā hy asmādeḥ saṅgrahād eva tattvajñānam, yac ca sūtra-kārasya jñānaṁ tac ceśvaracodanābhivyaktād dharmādiviśeṣād eveti.
- (26) Kir. p. 5. 1.2
- (27) Kir. p. 8. 1.9. ayam arthaḥ, śāstreṇa padārthān vivicya śrutismṛtītiḥsapurāṇopadiṣṭayogavidhinā dirghakālādavanair antaryasevitān nivṛttilakṣaṇād dharmād eva tattvajñānam utpadyate, yato'pavṛjyate.
- (28) NK. p. 7. 11.15—16.
- (29) NK. p. 7. 11.17—18.
- (30) NK. p. 8. 11.5—6. evaṁ śaṭpadārthajñānasya puruṣārthopāyatvaṁ pratitya teṣāṁ pratyekaṁ bhedaḥ jñāsārthaṁ paripṛcchati.
- (31) NK. p. 7. 1.25. dharmo'pi kevalaṁ tāvaṁ na niḥśreyasaṁ karoti yāvad īśvareccayā nānugṛhyate tenedam uktaṁ īśvaracodanābhivyaktād dharmād eveti /
- (32) Vyo. p. 20. (jha). 11.8—9.
- (33) Kir. p. 4. 1.15. ke padārthā ity apekṣāyāṁ padārthā dravyādayaḥ ke dharmā ity apekṣāyāṁ sādharmyarūpā vaidharmyarūpā—anuvṛttavyāvṛttarūpā ity arthaḥ /
- (34) Kir. p. 4. 1.17. tattvam anāropitaṁ rūpaṁ, tac ca sādharmyavaidharmyābhyām eva vivicyate /. GOS. No.154 では sādharmyadharmyābhyām eva となっているが、誤植である。
- (35) Kir. p. 4. 1.20: etena padārthā eva pradhānatayoddiṣṭā veditavyaḥ /
- (36) NK. p. 6. 11.9—10.
- (37) NK. p. 6. 11.10—18.

③⑧ Upa. 27. 11. 5—8.

③⑨ VS. 6. 1. 2. この経は Upa 本には欠く。linga の意味は Cand. 註に従った。

④⑩ Upa. では 9. 2. 13. Cand は第8章以下は āhnika に分けていない。

④⑪ Upa. 8. 1. 6.

④⑫ PDS が padārtha に与えた定義は「有であること」(astitva), 「表言されること」(abhideyatva), 「知られること」(jñeyatva), である (PDS, p.16)。「言葉によって表言されることの意味」は「表言されること, 知られること」を意味している。さて「有であること」に関してもやはり Praśastapāda は VS によっているのである。VS. 1. 1. 7 等に有であることが実体, 性質, 運動の共通性であることが説かれている。尚, padārtha の訳語としては長くなるから, 一応「句義」と伝統的な訳語を用いた方がよからうと考える。範疇の訳語はあまりふさわしくないであろう。

④⑬ しかし実際には世界の帰滅と創造等 VS にない問題も加えられている。それらは Praśastapāda の時代の思想の影響等も考えられるが, 今後の研究課題としたい。